幹事長日誌
（平成23年１月１日～12月31日）

鎌田英明

平成23年

１月１日（土）　：快晴　元旦

昨年は、朝鮮半島で一触即発の危機があったり、中国の漁船の領海侵犯があったりと、世の中が騒然とすることも多い年だった。

とは言え、少なくとも私の周りの庶民にとっては例年と変わりのないお正月が訪れた。

今年は、神皮も少し若返りを図ろうとの想いが会長にもお有りのようだ。

私も含め老兵は消えゆくのみ、なんてネ。

１月15日（土）　：晴れ　於／横浜ベイシェラトンホテル

常任幹事会

神皮始動。一級の寒波の到来とやらで雪も懸念されたが、幸い雪にはならずにすみ、皆元気に顔を揃える。今年も活発な活動をしていこうと誓う。

１月20日（木）　：晴れ　於／ホテルキャメロットジャパン

第６回神奈川フットケア研究会（共催：マルホ株式会社）

「下腿潰瘍、足趾壊疽その診断と治療」

東京医科大学皮膚科　入澤亮吉助教

「クリニックにおけるシューズカウンセリング」

野村皮膚科医院　野村有子

入澤先生には、病院でも在宅でも困っている、糖尿病をはじめとした下腿の血行不良による潰瘍、壊疽に対する対策と診断、さらにチームでの取り組みを分かりやすくご講演いただいた。

野村先生は、相変わらずのバイタリティーで、ご自身のクリニックでシューフィッターと共に進めているシューズカウンセリングの実際を示された。

どちらも参考になるお話で、有意義であった。今年も盛会。160名参加。

１月27日（木）　：晴れ　於／横浜ベイシェラトンホテル

編集委員会

河原委員長に代わって最初の委員会、元副委員長だけに戸惑うこともなく、会議の進行も早く、神皮18号も心配無さそうだ。

1月31～2月5日（月～土）：第16回感染症サーベイランス施行。

2月11日・12日（金・祝、土）：於／ホテルグランパシフィックLE DAIBA

第74回日本皮膚科学会東京支部総会

北里大学勝岡憲生教授が会頭を務められた支部総会が、「雪」の天気予報に参加者数が懸念されたが、心配をよそに盛大に開催された。

神奈川からも菅原前会長、栗原会長、米元常任幹事をオーガナイザーとしたシンポジウムが組まれ、多数の参加者で会場も賑わった。

３月２日（水）　：雨　於／横浜ロイヤルパークホテル

健保委員会
例会の健保Ｑ＆Ａの準備。
保険審査に関する誤解を解くべく、委員間でディスカッション。
新規開業も増えており、同じ疑問にも繰り返し回答することが正しい理解につながるのか。

３月３日（木）：安西喬元幹事長ご逝去の報。ご冥福を祈る。

３月６日（日）：晴れ　於／関内新井ホール
第135回神奈川県皮膚科医会例会（共催：アステラス株式会社）
テーマ「湿疹・皮膚炎群“ずっとステロイドを塗ってていいの？”」
「悪化因子が見つかった…？パッチテスト入院療法」
新潟大学医歯学総合病院皮膚科　伊藤明子講師
「マラセチア属真菌と皮膚」
明治薬科大学微生物学　杉田　隆准教授
「脂漏性皮膚炎の診断と治療」
「実際にマラセチアを見てみよう」
帝京大学医学部附属溝口病院皮膚科　清　佳浩教授
清担当幹事のライフワークともいえる「脂漏性皮膚炎とマラセチア」、湿疹・皮膚炎といったポピュラーではあるが、奥の深いテーマ。メチレンブルーを用いたマラセチアの顕微鏡観察の実習もあり、普段の例会とはちょっと変わった雰囲気に多数の参加者も楽しんだ様子。
伊藤先生の入院パッチテストも100種以上貼るということで一同びっくり。
いつもの例会ではあまりお見かけしないお顔も多かった。158名参加。

３月10日（木）：晴れ　於／エクセルホテル東急
第136回神奈川県皮膚科医会学術講演会準備会（企画委員会）
135回の盛会の要因の分析をして、今後の例会に生かすことが提案された。今回も若手のドクターは少なく、出席率向上は相変わらずのテーマだ。次回の136回は、演者、座長とも全て女性医師というプログラム案が提示され、いよいよJDCの勢力拡大か？

３月11日（金）：晴れ
東日本大震災（M9.0）発生　横浜市中区で震度６弱
地震の被害よりも、その後の大津波と福島原発の崩壊による放射能漏れなどで、東北地方の太平洋側を中心に被害は甚大なものとなった。「日本沈没」を思わせる大災害となった。

３月12日（土）：於／ホテルキャメロットジャパン
神奈川県感染性皮膚疾患講演会（学術・サーベイランス委員会）
「難治性疣贅の治療」
東京慈恵会医科大学皮膚科学講座非常勤講師
北里大学　江川清文客員教授
前日に、マグニチュード9.0という観測史上最大の地震が日本列島を襲った。
そんな余震も続く中での開催であったが、「いぼ」に向けられた江川先生の情熱が伝わってくるご講演に、一同しばし恐怖も忘れて聞き入った。

３月19日（土）：神奈川県皮膚科医会「春の勉強会」（産業医委員会、サノフィ・アベンティス株式会社共催）
大震災の影響でやむなく中止。

4月15~17日（金~日）：第110回日本皮膚科学会総会
大震災による、交通機関の問題、電力不足などを鑑み中止とされた。

４月21日（木）：神奈川県皮膚科医会学術講演会（共催：GSK）

大震災の影響でやむなく延期となる。

５月11日（水）　：晴れ　於／横浜ベイシェラトンホテル

会計・会務監査

杉本、金丸両監事にご出席いただき、監査を受ける。

会計のみならず、医会運営に関しても貴重なご示唆をいただく。有意義な監査であった。

５月14日（土）　：晴れ　於／ホテルキャメロットジャパン

第15回Joy Derma Club

「爪の病気・爪のケア」

東皮フ科医院　東　禹彦院長

ネイリスト　鶴田百合

今年もJDCの勢いは止まりません。参加者48名。

５月19日（木）　：晴れ　於／横浜ベイシェラトンホテル

編集委員会

今年も「神皮19号」発刊に向けて最後の調整。河原新委員長による最初の号となる。

原稿の集まりも良く、相変わらず楽しい会誌になりそうだ。

ただ、文章の中身によっては著作権問題に抵触することもあるため、たとえクローズドの医会誌といえ、それなりの注意深さが必要だということを学ぶ。

５月21日（土）　：晴れ　於／横浜ベイシェラトンホテル

常任幹事会

136回例会の最終チェック。例会と同時に開催される総会のための事業報告・決算、事業計画・予算案の最終取りまとめ。長らく変更されていない委員会構成なども少し見直しの時期に来ているのかも知れない。時代に即した変革も必要かも知れない。

5月24~29日（火~日）：於／ COEX Seoul

World Congress of Dermatology

４年に一度開催される世界皮膚科学会。今年はお隣韓国のソウルで開催されたこともあり、栗原会長はじめ、神皮からも参加者が多かった。企業展示のコーナーでは、さすが美容大国といわれるだけあって、レーザーをはじめとする美容機器と、化粧品会社のブースが大半を占めて、日本とは異なった雰囲気を味わった。ソウルは、まだまだ発展の最中といった熱気が漂っていたが、街中を埋め尽くす渋滞の車の波には閉口した。

不肖私も日臨皮代表枠のデリゲートの一員として参加した。次回開催地を決める投票ではカナダ・バンクーバーに決定した。４年後また皆で行くか。

6月3・4日（金・土）：於／パシフィコ横浜

日本褥瘡学会関東甲信越地方会

袋常任幹事が理事を務められる褥瘡学会の地方会が横浜で開催された。

大震災の影響で開催が危ぶまれたが無事に開催でき、神皮からも北里大の高須先生や私ども横浜中央病院の羽尾が演題を出し、全体でも約1,000人の来場があったとのこと。

6月11・12日（土・日）：曇り　於／大阪国際会議場

第27回日本臨床皮膚科医会総会

一部で中止も危惧されたが、大震災の影響もやっと落ち着き、予定通り大阪で開催された。

笹川会頭はじめ、スタッフ渾身のプログラムには敬意を表したい。

例のごとく、栗原会長以下「神奈川部隊」も多数集結し、大阪ナイトも堪能した。

６月18日（土）　：晴れ　於／横浜ベイシェラトンホテル

神奈川県皮膚科医会「初夏の勉強会」（共催：マルホ株式会社）

「ヘルペスもいろいろ」

済生会横浜市南部病院皮膚科　木花　光部長

「帯状疱疹関連疼痛の最新治療」

獨協医科大学麻酔科学　山口重樹准教授

「腎機能に基づいた抗ヘルペスウイルス療法の実際」

聖隷三方原病院皮膚科　白濱茂穂部長

日常診療でも悩まされるPHNの治療戦略など、ペインクリニックの知識も拝聴でき、正に日常臨床に即役立つ講演会であった。参加者133名。

６月25日（土）　：晴れ　於／ホテルキャメロットジャパン

第60回神奈川医真菌研究会（共催：ヤンセンファーマ株式会社）

昨年から神奈川県皮膚科医会も共催することになった医真菌研究会。今年も活発な討論が交わされ、おおいに盛り上がった。参加者63名。

６月29日（水）　：晴れ　於／ロイヤルパークホテル

健保委員会

例会Ｑ＆Ａ、健保諸問題について話し合う。

井上委員長が目指す審査のスタンダード作りも、画一的になっては各医師の裁量を犯す危険性もはらみ、中々難しい。

７月３日（日）　：晴れ　於／関内新井ホール

第136回神奈川県皮膚科医会例会（共催：協和発酵・キリン株式会社）

テーマ「妊娠と皮膚」

「妊娠と皮膚疾患」

慶應義塾大学医学部皮膚科　谷川瑛子専任講師

「妊娠・産褥期（授乳期）の薬剤使用について」

虎の門病院産婦人科・健康管理センター　横尾郁子医長

ミニレクチャー「食物アレルギーとNSAIDs」

横浜市立大学附属市民総合医療センター皮膚科　松倉節子講師

河原担当幹事の思い入れが伝わってくるような例会だった。担当幹事、演者、座長全てが女性医師というのも例会始まって以来のことで、テーマも女性に関連するテーマだったためか、女性会員の参加者が普段よりも多く、過去最高の出席者数を記録した。

内容的にもクリアカットなご講演で、これまでのモヤモヤしたものがすっきりした。

175名参加。

７月６日（水）　：曇り　於／崎陽軒本店

第137回神奈川県皮膚科医会学術講演会準備会（企画委員会）

136回例会が終わったばかりなのに、次回137回例会の最終チェック、さらに138回以降の検討、神奈川県皮膚科医会はこうして前に進み続ける。

７月16日（土）　：晴れ

中野政男元会長ご逝去の報が届く。

３月に亡くなられた安西喬元幹事長と共に神皮の礎を築かれた大先輩の訃報に、神皮の長い歴史の一区切りを感ずる。

新たな歴史を我々の手で築いていく責任の重さも改めて感じ、身も引き締まる。

7月27日～8日1日（水～月）：第17回感染症サーベイランス施行。

８月18日（木）　：快晴・猛暑　於／横浜ベイシェラトンホテル

臨時常任幹事会

中野政男元会長が亡くなられ、３月に亡くなられた安西元幹事長と共に神皮の創成期を築いてこられた両巨頭を偲ぶ会の開催に関する話し合いのため、急遽集まる。
栗原会長の会に対するコンセプトにみなも賛同し、月並みな「偲ぶ会」ではなく、文化講演会的な会にすることで了承された。
鎌田を中心に実行部隊を構成し、進めることとなった。

９月８日（木）　：晴れ　於／ホテルキャメロットジャパン
第20回在宅医療勉強会（共催：興和創薬株式会社）
「災害現場で皮膚科医がみた看護師の底力！」
群馬大学大学院医学系研究科皮膚科学　安部正敏講師
「糖尿病性足病変予防対策最前線」
東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻老年看護学／
創傷看護学分野　真田弘美教授
安部先生は、３月11日の大震災後の被災地に入って体験された実情を、持ち前のユーモアに満ちた語り口で披露され、災害地でのナースパワーの必要性を説かれた。
一方の真田先生は、糖尿病性の壊疽や潰瘍という、これまでにはなかったテーマで話され、またまた「リラウェーブ」なる振動を与えて血行を良くするという新兵器も登場し、得るところが多い講演であった。参加者191名。

10月13日（木）　：曇り・雨　於／ホテルキャメロットジャパン
神奈川県皮膚科医会・学術講演会（共催：グラクソ・スミスクライン株式会社）
「そう痒性皮膚疾患治療における抗ヒスタミン薬のポジショニング」
ＮＴＴ東日本関東病院皮膚科　五十嵐敦之部長
本年４月に計画されていた講演会であったが、東日本大震災のために、秋の勉強会として仕切りなおしになったもの。
五十嵐先生が数ある抗ヒスタミン薬の特徴や持ち味を分類、丁寧な講演を行ってくださった。参加者51名。

10月15日（土）　：晴れ　於／横浜ベイシェラトンホテル
常任幹事会
異常気象のためか、はたまた地球がおかしくなっているのか、10月とは思えない真夏のような日差しが日中は降り注いだ中での開催。
通常の会議内容に加え、１月に開催予定の「新春講演会」（中野･安西両先生の追悼の集い）の内容の最終確認も行う。武沼常任幹事から次々妙案がでて、大いに助かる。

10月19日（水）　：曇り　於／スカイビル
広報委員会
11月３日の「ひふの日」イベントに向けた最終打ち合わせの会。
大震災や、津波による原発破壊に伴う放射能被害、台風による土砂災害など、色々大変なことが起こった１年だったが、「ひふの日」が近づくと、もう年末も近い。

11月３日（木・祝）：晴れ　於／横浜情報文化センター　情文ホール
「ひふの日」イベント
今年も、小林誠一郎先生を中心に広報委員会の先生方やボランティア参加の先生方のおかげで、大盛況であった。講演内容が「シミ」ということもあって、女性の参加者が多くを占め、講演終了後も相談希望者が引きもきらず、急遽ブースを増やす一幕もあった。

11月５日（土）　：晴れ
内山光明元常任幹事ご逝去の報。今年は神皮にも悲しい年になった。

ご冥福を祈る。

11月19日（土）　：雨・風　於／パンパシフィック横浜ベイホテル東急

第16回Joy Derma Club

テーマ「歯とアンチエイジング」

次々に新たなテーマが出てきて、打ち出の小槌のよう。59名参加。

11月30日（水）　：晴れ　於／横浜ベイシェラトンホテル

健保委員会

例会Ｑ＆Ａ、健保コーナーの内容について打ち合わせ。

今後、審査に縦覧、突合せが導入されることになる。

審査員の仕事量が更に増えそうだ。

12月４日（日）　：快晴　於／関内新井ホール

第137回神奈川県皮膚科医会例会（共催：日本ベーリンガーインゲルハイム株式会社）

テーマ「皮膚科医の得手？不得手？」

「水いぼ治療、紫外線対策について―学校保健の立場から―」

前橋皮膚科医院（日臨皮学校保健委員会委員長）　大川　司院長

「ファイナルアンサー　使えるジェネリック外用医薬品はこれだ」

東京逓信病院薬剤部　大谷道輝副部長

ミニレクチャー「抗アレルギー剤の使い分け」

北里大学皮膚科　谷口友則

企画の段階では正直言って難しいかと思われていた内容だったが、小幡担当幹事の執念が実り、天気も上々、大いに盛り上がりを見せた会であった。

どちらのご講演にもいくつもの「へえ～！」があった。130名参加。

12月８日（木）　：雨　於／横浜ベイシェラトンホテル

第138回神奈川県皮膚科医会学術講演会準備会（企画委員会）

例会も終わったばかりというのに、早速次の例会の準備作業に入る。

いつも思うが、これが神皮の伝統に裏打ちされた底力ということなのだろう。

12月15日（木）　：曇り

安西喬・中野政男両先生が相次いでご逝去された今年。お二人のご逝去を節目とした会の企画がようやく決まり、「神皮文化の集い」として、案内状を発送する。

12月31日（土）　：曇り

未曾有の自然災害に翻弄された今年も大晦日を迎える。

今年は、これまでの生き方を考え直した人も多かったと聞く。いろいろなものの価値観も見直された１年であった。

わが神皮も、幅広い視野に立ってこれからの皮膚科を考えていくべきだろう。

来年がどんな年になるかは分からぬが、みんなでよい年にしていきたいと思う。

今年の締めも、１年間滝のように浴びた「命の水」で。

委員会報告

学術・サーベイランス委員会だより

米元康蔵

学術・サーベイランス委員会の継続的事業となった感染症サーベイは、その定点を引き受けていただいている先生方のおかげで第18回を数えるに至っております。ご協力いただいている先生方にはここに感謝するとともに引き続いてのお力添えをよろしくお願い致します。また、今年度は別の企画として正会員の先生方を対象に、手足のウイルス性疣贅の治療に関するアンケート調査を行わせていただきました。お答えいただいた先生方本当にありがとうございました。その集計結果については、先ずは先日の第138回例会にて報告させてもらいましたが、次いで来る第28回日臨皮総会にてポスター発表をすることになっております。

今後とも会員の皆様には、サーベイランス委員会の事業に継続的なご理解・ご協力をいただきますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

平成23年度の事業報告

平成23年６月	手足ウイルス性疣贅のアンケート調査
平成23年７月27日～８月１日	第17回感染症サーベイランス
平成24年１月30日～２月４日	第18回感染症サーベイランス
平成24年２月14日	学術・サーベイランス小委員会
平成24年３月４日	例会にてアンケート調査集計結果報告

委員会報告

Joy Derma Clubだより

齊藤和美、野村有子

●第15回　Joy Derma Club

日　　時：平成23年５月14日（土）
場　　所：ホテルキャメロットジャパン４階
共　　催：ヤンセンファーマ株式会社
参 加 者：45名
担当幹事：新井裕子、高橋さなみ、齊藤和美

プログラム

１．話題提供　「ステラーラ®」ヤンセンファーマ株式会社

2．開会の挨拶　増田智栄子先生

3．ミニレクチャー　「ネイルサロンにおける日常ケア」　ネイリスト：鶴田百合先生　座長：新井裕子先生

診療の度に手を洗い、また患者さんの手や爪を診て診断をするためか、皮膚科医が爪を飾ることはほとんどありません。にもかかわらず、街を歩くとあちこちに大小様々なネイルサロンを目にし、日常診療中にネイルサロンにおけるケアについて質問される機会も増えていることと思います。本やインターネットで調べても実際見るのとは違うので、ネイリストの鶴田先生にネイルサロンでの手技をご講演いただきました。

ネイルサロンでは爪のケア、ハンドケア、フットケアを行っており、そのうちの爪のケア、最近一番人気のあるジェルネイルにつき、用いる器具、手順などをスライドでご説明いただきました。ジェルネイルにもいくつか種類があり、その長所、短所を織り交ぜながら、つける手順（どの段階でどのような薬品を使うのか、どのタイミングでUVライトを使うのかなど）、はずす手順、また続けて装着する場合の手順、最後に極端に爪の短い人に対する爪のエクステンションのつけ方などを伺いました。更に鶴田先生のオリジナルのネイル（見本）も見せていただき、目の保養になりました。

4．症例報告　「ジェルネイルの自己施術後に生じた皮膚障害」　河原由恵先生

今回飛び入りで症例報告が入りました。河原先生が経験された、自己施術でジェルネイルを行った症例の報告でした。炎症の強い指先の異汗性湿疹様の反応で、ジェルネイルに用いるジェルの中にUVに反応する成分があり、それによる接触皮膚炎か？とのことでした。インターネット等で簡単にネイル用キットが手に入る今日、自己施術によるトラブルでこのような症例が増えてくるかもしれません。

5．特別講演　「日常よく遭遇する爪疾患の対処法」　東　禹彦先生（東皮フ科医院）

座長：毛利　忍先生

特別講演「日常よく遭遇する爪疾患の対処法」、まさに『The 爪 ～爪の基礎から応用まで』でした。爪は普段よく目にする割に診断が難しく、また治りにくいがゆえに指導もしづらい部分です。爪の役割から始まり、爪の変形する過程、「深爪」からはじまる爪及び爪周囲のトラブルに対する生活指導などの基礎的なところ、また診断しづらい臨床のポイントや鑑別点、更に爪に生じる比較的稀な疾患、最後に変形爪に対するアクリル人工爪療法の施術法につき、東先生の豊富な臨床症例の写真を見ながらご講演いただきました。

翌日からの診療にきっと役立ったことでしょう。

6．情報交換会　ためになる講演のあとは、見た目にもおいしいお食事とお酒で楽しい懇親会となりました。

（文責：齊藤和美）

●第16回　Joy Derma Club

平成23年11月19日（土）に第16回勉強会が開催されました。地方会の後、大嵐の悪天候にもかかわらず、59名が集合しました。

テ ー マ：歯とアンチエイジング
場　　所：パンパシフィック横浜ベイホテル東急
担当幹事：野村有子、山川有子
共　　催：株式会社ポーラファルマ

プログラム

1．開会のあいさつ　JDC会長　毛利　忍

2．ミニレクチャー　「若々しい印象づくりのためのポイントメークのコツ」

ポーラファルマのメイクの担当の方から、①血色よくイキイキした印象に　②たるみがちな印象をシャープに　③微笑み顔をつくるそれぞれのコツについて説明がありました。その後、羽尾先生がモデルになり、ポイントメイクの実演があり、羽尾先生が艶やかな女性に変身しました。

3．特別講演　「歯から始めるアンチエイジング～歯科疾患が全身に及ぼす影響～」

若林健史先生（若林歯科医院院長）　　座長：野村有子

若林先生は、日本の歯周病学会を牽引しており、ポリデントやポリグリップのCMやセミナー講師、執筆など多方面でご活躍の歯科医です。平成元年に代官山でご開業なさいました。診察室はすべて個室で、待合室にはリラックスできる椅子を配置したり坪庭を造ったり、患者さまの事を一番に考えた素敵なクリニックです。若林先生より、歯周病を中心に歯のアンチエイジングについてご講演いただきました。本来28本ある歯（親知らずを入れず）が、80歳になると何と平均8.9本にまで減ってしまうという衝撃的な事実が告げられました。80歳まで20本をキープすることが目標とされています。歯を失う原因の32％が虫歯、42％が歯周病、その他（事故や怪我など）が26％です。虫歯は好気性菌により歯が破壊される疾患、歯周病は嫌気性菌により歯肉や骨が破壊される疾患です。砂糖と歯垢がその主な原因であり、食後に歯を磨くことと砂糖を控えめにすること、歯垢を定期的に除去するメインテナンスをすることにより、虫歯と歯周病はかなり予防できることが説明されました。また、傷んだ歯を治すことによって、人の表情が変わり、人生まで変わること、すなわち「人生を変える歯科医」として今後も診療を行っていきたいことが話され、皮膚科医との共通点も見出され、非常に感銘を受けた講演でした。

懇親会では、若林先生は参加した女性皮膚科医にとり囲まれ、話題は尽きませんでした。

（文責：野村有子）

委員会報告

在宅医療委員会だより

袋　秀平、山田裕道

今回で在宅医療委員会の勉強会は20回となりました。そこで勉強会の冒頭、第１回から19回までの演題・演者の一覧を提示しました（P43.別表）。最近は会場のキャパシティーを心配するほど参加者も増えた勉強会ですが、草創期はひとかたならぬご苦労があった由、そのころを支えられた先生方に深く敬意を表したいと思います。

●第20回神奈川県皮膚科医会在宅医療勉強会

日　時：平成23年９月８日（木）19：00～

会　場：ホテルキャメロットジャパン

参加者：191名

共　催：興和創薬株式会社

講演テーマならびに講師：「災害現場で皮膚科医がみた看護師の底力！」

群馬大学大学院医学系研究科皮膚科学講師　安部正敏先生

「糖尿病性足病変予防対策最前線」

東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻老年看護学／

創傷看護学分野教授　真田弘美先生

講演１　災害現場で皮膚科医がみた看護師の底力！

日本皮膚科学会では、平成23年３月11日に発生した東日本大震災について、『日本皮膚科学会東日本大震災

対応計画実施要項』を定め、支援を実施することとし、「日本皮膚科学会東日本大震災対策本部」が設置された。実施対象事業として、東日本大震災におけるボランティア診療支援が行われた。演者はその第２陣派遣に参加する機会を得、さらに褥瘡診療を中心として活動を命じられた。派遣期間は、平成23年４月27日～30日であった。第２陣派遣医師は稲富　徹先生（日本大学）、大竹映香先生（日本大学）、横山恵美先生（埼玉医科大学総合医療センター）、安部正敏先生（群馬大学）の４名であった。診療を行った施設は複数であるが、褥瘡患者を診察したのは、南三陸町の在宅訪問診療と石巻市遊楽館避難所である。このうち石巻市遊楽館避難所は、在宅と病院の中間的施設であり、病院に入院するほどではない患者のみが利用する試みがなされており、災害時医療の模範的役割であると考えられる。

褥瘡診療に関しては、予想外に軽症の症例ばかりであった。但し、これは演者の個人的な経験例であり、すべての地域で褥瘡が軽かった訳ではない。その裏には、自ら被災者でありながら、眼の前の患者の懸命なケアを行うひたむきな看護師の活躍があった。

今回の経験から被災地における褥瘡診療の問題点としては以下の３点を考えた。

１．不適切なエアマットの使用

震災後、優れたエアマットが支給され、在宅患者にも使用されていた。この様な迅速な支援は素晴らしい取り組みであるが、触ってみると圧が高すぎ不適切な使用状態であった。家族に話を聞いてみると、圧設定は患者の体重などのデータを入力し、自動的に設定されているとのことであり、その値は日々家族の確認がなされていなかった。付近では停電も度々生じており、エアマットは一旦電源が落ちてしまうと、その都度設定が初期化されるため十分な注意が必要である。震災により折角優れたマットが支給されても、使用法を誤ると逆に褥瘡発生を誘発する可能性も高い。可能であれば同居家族に圧調整を指導し、理解してもらう試みが必要である。

２．体位変換の不徹底

患者本人の癖などを訊いてみると、長時間左を下にした横向きの姿勢を保持するとのことであり、実際訪問した患者もその様な体位であった。当然その結果として、左大転子部にステージIの褥瘡が出来ていた。上述したエアマットの問題もあってか、比較的大型の紅斑であった。患者本人とのコミュニケーションも取れることから、今回家族を含めて２時間に１回の体位変換を促した。この点、家族に対しては、単に体位変換を喚起するだけでは駄目で、褥瘡の発症メカニズムを多少なりとも理解させることが重要であり、この程度の褥瘡であればドレッシング材なしでも、体位変換で治癒するレベルであると考えた。

３．洗浄

震災のため断水しており、十分な創面の洗浄がなされないとのことであった。この点を考え、今回はアルケア株式会社提供のリモイス®クレンズを持参し、提供した。水が手に入らない際には洗浄において非常に有用であり、喜ばれた。

前述の如く、今回の被災地の褥瘡患者が軽症であった背景は、看護師の活躍以外の何ものでもない。自ら被災者でありながら、皮膚・排泄ケア認定ナースをリーダーとして、こまめに患者を見廻り、ケアを遂行された看護師の皆様には頭が下がる思いである。この点、震災列島と言われる本邦では不慮の事態に備え、皮膚科医自らが創傷診療に高い問題意識と研鑽を積むのは勿論のこと、日頃から地域の皮膚・排泄ケア看護師を中心とした「創傷に強い看護師」の育成を支援していく地道な取り組みが必要である。褥瘡を集学的治療と理解し、それぞれがその専門的スキルを結集することこそ、広い意味で震災対策になるのではないかと考えた。

講演２　糖尿病性足病変予防対策最前線

講演のはじめに、東日本大震災に対する日本褥瘡学会、日本創傷・オストミー失禁管理学会からの支援について述べられた。また、ブレーデンスケールの考案者であるブレーデン博士とのインタビューで、この20年間の褥瘡対策は日本が一番進んだとのお話が披露された。ヨーロッパ創傷管理学会（ブリュッセル）の話題も提

供された。

１．東京大学における糖尿病足外来のとりくみについて

４年間で1,321人の受診があった。主訴の確認、診察、エコーなどによる評価を行い、ケアの仕方について教育を行う。初診で90分、再診でも30～60分を要する。

２．インターナショナルコンセンサスのリスク分類

グループ０～３の約３割は半年に１回以上のフォローが必要であり、換算すると月に552人、１日18名のフォローが必要となるがそれは困難である。とくにその中で神経障害がある患者のフォローが重要であり、鶏眼、爪変形、乾燥と亀裂のリスクが高い。

①鶏眼・胼胝

糖尿病患者において、胼胝があると、足潰瘍をおこすリスクは胼胝なしの11倍である。炎症に着目すべきだが発赤が出にくい傾向があり、サーモグラフィが有効な評価手段となる。糖尿病患者の足底のサーモグラフィのパターンはatypicalなものが多いが、胼胝のところだけ温度が高い傾向がある。境界が明瞭な胼胝は悪化する傾向がある。

今後は圧迫だけでなくずれも軽減するようなfootwareの開発が必要である。

②爪変形

糖尿病患者の主訴と医療者の所見には乖離がある。爪異常に気付いている患者は19％に満たない。特に爪白癬についてその傾向が強い。爪白癬の罹患については、「足を洗っているか否か」が、HbA1c、血管障害、肝疾患のどのファクターよりも関連深いことがわかった。蛍光ローションを使用して可視化すると、足白癬のある患者の方が、ない患者にくらべて足の洗い方が悪いことが判明した。

③乾燥・亀裂

講演では省略。

以上の取り組みから、2006年から2010年の間、足潰瘍の新規発症は２名のみであり、一般的なデータと比較すると低く抑えることができた。

３．リラウェーブ

電磁誘導を用いて振動を与える装置で、循環の改善を促す効果がある。国保旭病院における検討では、36例の足潰瘍に用いて悪化した例はなかった。

（文責：袋　秀平）

●第６回神奈川フットケア研究会報告

日　時：平成23年１月20日（木）19：00～21：00

会　場：ホテルキャメロットジャパン５階　ジュビリー　II・III

参加者：会員72名、コ・メディカル88名　合計160名

共　催：マルホ株式会社

講演テーマならびに講師：「下腿潰瘍、足趾壊疽その診断と治療」東京医科大学皮膚科　入澤亮吉先生

「クリニックにおけるシューズカウンセリング」野村皮膚科医院　野村有子先生

足の疾患はまずは皮膚科医が診る、必要に応じて他科へ依頼する、そういうコンセプトを皮膚科医も患者さんも共有すべきと考え、神奈川県皮膚科医会では平成18年に本研究会を立ち上げ、皮膚科医とコ・メディカルの方々と一緒に勉強する機会を提供してまいりました。

さて６回目を迎えた神奈川フットケア研究会は、東京医大から入澤亮吉先生、野村皮膚科医院から野村有子先生のおふたりの先生をお招きしました。入澤先生には血行障害を伴う下腿潰瘍、足趾壊疽を複数の臨床科と複数のコ・メディカルスタッフによるフットケアチームで治療しているお話をしていただきました。野村先生は神奈川県皮膚科医会の会員でかつ在宅医療委員でもあり、本研究会でもおなじみの先生です。野村皮膚科医

院では月に１回義肢装具士が来られ、外反母趾や偏平足、その他足の変形のある患者さんの靴の相談にのっています。必要に応じて患者さんの足にぴったりあった医療靴の製作もおこなっているとのことでした。これは通常の皮膚科クリニックではできないシステムであり、聴衆の注目を集めていました。

県皮膚科医会の会員の先生が72人、コ・メディカルの皆様が 88人で、合計160人の参加があり、盛況のうちに終了しました。

特別講演Ⅰ　下腿潰瘍、足趾壊疽その診断と治療

東京医科大学皮膚科助教　入澤亮吉先生

下腿や足趾の潰瘍を来す疾患は多岐にわたる。われわれ皮膚科にとっては血管炎、肉芽腫などによる潰瘍は生検で診断をつけることが可能なため、比較的身近な疾患である。その一方で、皮膚科の日常診療でもしばしば遭遇する動脈性潰瘍、静脈性潰瘍の診断、治療は不得手であるといわざるを得ない。末梢動脈疾患（Peripheral arterial disease：PAD）による潰瘍はこれを認めた時点でFontaine分類のⅣ度、すなわち最重症の重症虚血肢（Critical limb ischemia：CLI）である。これはすなわち、全身疾患であることを示す特徴であり、患者の生命予後やQOLに大きく係わる病態といえる。治療には血管外科だけでなく関連各科の総合的な介入が不可欠であるので、日ごろから病診連携を密にしておく必要があろう。また、静脈性潰瘍については、軟膏療法や日常生活指導など、皮膚科医の担う役割は大きい。昨年、当院ではフットケアチームが立ち上がり、血管外科、形成外科、糖尿病内科、腎臓内科、リハビリテーション科、WOCN（Wound Ostomy Continence Nurse）、ソーシャルワーカー、皮膚科という布陣でチーム活動を開始した。そこで、当院のフットケアチームの概要と皮膚科の役割を説明するとともに、下腿潰瘍や足趾壊疽を起こす疾患の診断および治療、特に、皮膚潰瘍に対してのEBMに則した軟膏療法について紹介したい。

特別講演Ⅱ　クリニックにおけるシューズカウンセリング

野村皮膚科医院　野村有子

株式会社ブレース・ジャパン義肢装具士　齋藤拓也

皮膚科で診察する足の疾患の中で、靴を合わせることにより改善される疾患もある。当院では、平成16年より月に１回、義肢装具製作会社との連携によるシューズカウンセリングを行い、必要に応じて患者の医療靴の作製をしている。これまでに、19 ～ 94歳（平均年齢63.1歳）の212名（男性10名、女性202名）の靴を作製した。疾患は、外反母趾（90％）が最も多く、他に扁平足（4.7%）、リウマチ（4.7%）、内反小趾（0.6%）があった。合併症として鶏眼・胼胝や巻き爪が多かった。

シューズカウンセリングは、医師の診察・診断の後、義肢装具士・看護師による還付金制度の案内、採型・採寸、デザイン選択の上、医療靴が作製される。完成後その適合・修正を行った後、患者の手元に届く。自分の足に合った靴を履くことにより、足の変形の早期治療が可能で、疾患の重症化の予防、QOLの向上、医療費削減にもなると考えられる。

（文責：山田裕道）

〈在宅医療委員会勉強会の歴史〉

回	日時	テーマ	講師
1	1997／３／25	アンケート結果	
2	1998／３／23	企画委員会と共催	
3	1998／９／10	疥癬について	林　正幸
4	1999／９／９	皮膚疾患をもつ在宅療養者の現状と介護保険に向けての課題 在宅における褥瘡の治療 中区本牧周辺住宅地における往診112例	小林邦代 増田智栄子 渡辺知雄
5	2000／９／14	最近の褥瘡アセスメントとケア技術	真田弘美

6	2001／2	在宅医療における保険請求について	在宅委員会
7	2001／9／27	褥瘡患者の栄養管理	真田弘美
8	2002／2／23	車いす使用者の褥瘡予防と再発防止に不可欠なシーティング	山崎泰広
9	2002／9／12	褥瘡対策未実施減算等保険制度について チームでの褥瘡管理	興和学術 村木良一
10	2003／9／25	褥瘡予防・管理のベストプラクティス	真田弘美
11	2004／2／5	褥瘡	大浦武彦
12	2004／9／9	褥瘡管理のUp-to-date	真田弘美
13	2005／3／3	熱傷創治癒モデルからみた新しい局所療法 モイストウンドヒーリング入門	佐々木淳一 塩谷信幸
14	2005／9／15	在宅医療におけるネットワークの必要性 よく見る高齢者の皮膚トラブルについて	岡田孝弘 田邉　洋
15	2006／9／14	皮膚科在宅医療の診療報酬 最新の創傷管理―基礎と実践	増田智栄子 真田弘美
16	2007／9／13	在宅で足の潰瘍をみたら 褥瘡対策最前線	浅井俊弥 真田弘美
17	2008／9／11	在宅褥瘡調査：皮膚科医の在宅褥瘡への介入効果について 藤沢市民病院における褥瘡の医療連携～理想と現実のはざまで	袋　秀平 内藤亜由美
18	2009／9／10	神奈川県の高齢者施設に対するアンケート調査から 皮膚科医からみた褥瘡診療：知って得するプラスワン	袋　秀平 安部正敏
19	2010／9／9	不適切な湿潤療法による被害・いわゆる“ラップ療法の功罪” 地域医療連携における在宅チーム医療と多職種連携 ～開業医のチームが可能にする高度在宅医療～	盛山吉弘 片山　壽

委員会報告

産業医委員会だより

宋　寅傑

産業医委員会では、平成23年度も委員会と勉強会を各１回ずつ開催いたしました。

最初に委員会開催についてですが、今回が第12回の委員会開催となりました。今回も産業医委員会では、平成21年度から始まった電子会議（メンバーが実際に集合して会議を行う形式ではなく、各メンバーが職場や自宅にてeメールを使って議事や意見のやりとりを行う会議形式）にて委員会を開催いたしました。昨年までは12月に副委員長の宋より議事を送信しておりましたが、今回は副委員長の不手際で送信がやや遅れ、平成24年１月10日に議事を送信して、電子会議を開始いたしました。今回の会議では以下の事項を議題といたしました。(1) 産業医委員会委員およびオブザーバーについて：平成23年度は医会役員の改選がなく、委員およびオブザーバーのメンバー変更はありませんでした。(2) 平成22年度“春の勉強会”中止の報告：平成23年３月19日（土）に、通算第５回産業医委員会勉強会となる神皮“春の勉強会”を、中村・平井・田邉法律事務所弁護士、田邉皮膚科外科院長の田邉　昇先生を演者にお迎えして開催する予定でしたが、同年３月11日に突発した東日本大

震災の影響によって誠に残念ながら勉強会は中止され、第５回は“幻の勉強会”となりました（詳細は“神皮”第18号〈平成23年７月〉46～48ページに記載）。(3) 平成23年度の産業医委員会勉強会について：通算第６回となる平成23年度の産業医委員会勉強会に関しては、昨年中止となってしまった勉強会の内容にてそのまま開催させていただくという方針で演者、座長その他関係する先生方に御承諾を頂いた上で、中村・平井・田邉法律事務所弁護士、田邉皮膚科外科院長の田邉　昇先生を演者にお迎えし、関東労災病院皮膚科の足立　真先生に座長をお願いして勉強会を開催させていただくこととなった旨、委員およびオブザーバーの先生方にお知らせいたしました。また、当日のタイムスケジュールと役割分担についても案をお示しいたしました。(4) 平成24年度以降の産業医委員会企画による勉強会について：メールを送信した１月時点においては次回勉強会の内容は未定の状況にあり、委員およびオブザーバーの先生方に今後の企画について御意見を求めました。その結果、数名の委員より次回勉強会のテーマや演者に関して、早くも建設的な意見が提案されました。

次に平成23年度勉強会についてですが、勉強会は、今回も神皮医会『春の勉強会』と題して平成24年３月24日（土）午後５時半より、横浜ベイシェラトンホテル＆タワーズにてサノフィ・アベンティス株式会社との共催により開催いたしました。演者には、先に記しました通り、中村・平井・田邉法律事務所弁護士、田邉皮膚科外科院長の田邉　昇先生をお迎えし、『アレルギー実地診療とそれに潜む法的リスクとその対策』という御演題で１時間近くの御講演をいただきました。当日は日中雨が降っておりましたが夕方から雨が止んで晴れ間がさしたこともあってか、出席者数は49名とこれまでの産業医委員会の勉強会としてはかなりの上位を占める人数となりました。田邉先生には予め“産業医”の要素を強めると講演の内容が硬くなるので“あまり産業医臭くない”内容にて御講演をお願いいたしますという“産業医委員会”にはあるまじきリクエストを送っておりましたが、田邉先生はその要求に見事にお応えくださり、御講演中会場は一種独特の熱気に包まれておりました。

御講演は、医療裁判の流れと医療に関する法律についての概説、医療裁判で実際に示された珍判例を含む数々の判例、抗アレルギー薬の使用に潜む法的な危険性といった内容にて展開して参りましたが、日々我々が行っている医療行為が妥当か否かという解釈は、医師と法律家では全く異なり、時には性格的にかなり問題のある裁判官も裁判に係わることがあるので、我々が行っている医療行為が医師以外の人々にどのように解釈されるかも考慮しながら日々の診療に当たる必要があるということが教訓として示されました。また、医学的に誤った法的判断に対しては今後学会や医会などの組織が一体となってまとまった意見を述べ、相手方に修正を促してゆくべきであることも御教示いただきました。田邉先生の熟練した軽妙な語り口と示唆に富む御講演内容に、会場内にはしばしば笑いやどよめきが起こり、勉強会は終始熱気に包まれたまま大盛況のうちに終了することができました。

御講演終了後は例年通り情報交換会の場を設け、ここでも田邉先生は短い時間にいろいろな先生方から御質問や御意見を受け、にこやかに応対されておりました。今回、御講演の終了後には医会を代表して副会長の浅井俊弥先生より御挨拶をいただき、情報交換会におきましては副会長の増田智栄子先生より乾杯の御発声をいただき、情報交換会の司会進行役は黒澤傳枝先生にお願いいたしました。また事務担当の瀬尾様にも土曜日夕方にもかかわらず受付業務を御担当いただきました。演者・座長の先生ならびに御協力を賜りました先生方と瀬尾様には深く感謝を申し上げる次第です。

平成17年度以降、年に１回ずつの委員会開催と勉強会開催をその主な活動内容としている産業医委員会ですが、本年７月には医会の委員会再編成が行われる予定とのことで、今後産業医委員会がこのままの形で存続できるか否かははっきりしない状況とうかがっております。が、枠組みを変えましても今後当委員会がまた何らかの形で皆様のお役に立てる機会がございましたなら、是非とも御支援と御指導、御鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

●神奈川県皮膚科医会“春の勉強会”

開催日時：平成24年３月24日（土）　午後５時30分より

会　　場：横浜ベイシェラトンホテル＆タワーズ
演 題 名：『アレルギー実地診療とそれに潜む法的リスクとその対策』
演　　者：中村・平井・田邉法律事務所弁護士、田邉皮膚科外科院長　田邉　昇先生
座　　長：関東労災病院皮膚科部長　足立　真先生
共　　催：サノフィ・アベンティス株式会社
企　　画：産業医委員会

『アレルギー実地診療とそれに潜む法的リスクとその対策』
中村・平井・田邉法律事務所弁護士、田邉皮膚科外科院長　田邉　昇先生

医療訴訟は、近時漸減傾向にあったが、サラ金への過払い金請求の終息で再度増加する懸念がある。皮膚科は訴訟リスクは高い診療科ではないが、形成外科が高リスクであることからは皮膚への侵襲行為はリスクの高い行為であるといえる。アレルギー関連の裁判は花粉症ならヨード過敏と思えという横浜地裁平成15年６月20日判決など裁判官の理解度は非常に低い。また、産業医としても、自律神経失調患者への激励で60万円の損害賠償が認められた大阪地裁平成23年10月25日判決など職員への言動も注意が必要である。

委員会報告

広報委員会だより

小林誠一郎

●2011年度「ひふの日」行事報告

広報委員　こばやし皮ふ科クリニック　小林誠一郎

11月12日は、いいひふの日として記念日協会に登録され、医師を中心に皮膚に関する啓蒙活動を続けております。今年度も11月３日（水）に情報文化センター情文ホールで、イベントを開催しました。

日時：平成23年11月３日（水）午後２時～３時半
会場：情報文化センター情文ホール

プログラム

司会：齋藤典充先生
１．開会のご挨拶　神奈川県皮膚科医会幹事長　鎌田英明先生
２．講演　「『しみ』治療最前線　～いつまでも若く、きれいでいるために～」
湘南鎌倉総合病院形成外科・美容外科部長　山下理絵先生
美容への関心の高さの表れか多くの女性がご来場され、皆さん非常に熱心に参加されていました。
３．皮膚のトラブルQ&Aコーナー
イベント応募時に書いていただいた「皮膚科医への質問」について、司会の齊藤先生が以下の先生方に質問

をして、答えていただきました。
担当の先生方：浅井俊弥先生、高須　博先生、増田智栄子先生、栗原誠一先生
４．閉会のご挨拶　神奈川県皮膚科医会会長　栗原誠一先生

製品展示・紹介コーナーでの見学会

ホワイエで展示されているスキンケア製品の商品説明・スキンケア製品のサンプリングに、大勢のお客様が熱心に説明を聞き、大盛況でした。ここ数年間人気の無料肌年齢コーナーは今年も希望者が多く順番待ちカードは開始してすぐに品切れでした。

「お肌のトラブル相談コーナー」は２部構成で行いました。
相談医の先生方：川上民裕先生、大林寛人先生、宮本秀明先生、井上奈津彦先生、松井　潔先生、
宮川俊一先生、毛利　忍先生、河原由恵先生、渡辺知雄先生、蒲原　毅先生
参加者数：来場者数　275名、相談者数　39名

協賛：展示・おみやげサンプリングメーカー（９社）
アクセーヌ株式会社　大島椿株式会社　ダイワボウノイ株式会社　サンスター株式会社　常盤薬品工業株式会社　株式会社ポーラファルマ　マルホ株式会社　日本ロレアル株式会社　ミヨシ石鹸株式会社
賛助・労務提供メーカー（26社）
ロゼット株式会社　エーザイ株式会社　MSD株式会社　大塚製薬株式会社　科研製薬株式会社　ガルデルマ株式会社　グラクソ･スミスクライン株式会社　グラファ ラボラトリーズ株式会社　佐藤製薬株式会社　協和発酵キリン株式会社　サノフィ･アベンティス株式会社　塩野義製薬株式会社　大正富山医薬品株式会社　第一三共株式会社　大日本住友製薬株式会社　大鵬薬品工業株式会社　田辺三菱製薬株式会社　株式会社ツムラ　鳥居薬品株式会社　日本ベーリンガーインゲルハイム株式会社　ノバルティスファーマ株式会社　バイエル薬品株式会社インテンデス事業部　藤永製薬株式会社　株式会社ポーラファルマ　マルホ株式会社　ヤンセンファーマ株式会社

イベント案内掲載
神奈川新聞

ここ数年は開催場所を情文ホールに、さらに日付も11月３日・文化の日に固定しました。運営委員と御協力いただける先生方および労務提供の方々のお力で、盛況となることができました。ありがとうございました。学術総会でもないのに一つのイベントに皮膚科医はもちろんですが、このようにたくさんの企業から労務提供していただけるのはほかではあまりないことだと思います。

当日ご来場いただきますとどのようなイベントになっているかわかっていただけると思います。次年度平成24年11月３日、情文ホールにてイベントを予定いたします。まだイベント会場に足を運んでいらっしゃらない先生方も次回はぜひ一度ご参加ください。

委員会報告

IT委員会だより

浅井俊弥

氷結した湖に落ちる！

昨年の東日本大震災と福島第一原発事故を受けて、今年の日本医師会情報システム協議会は「災害時に強い情報システムはどうあるべきか」をメインテーマとして開催された。中でも現場からの詳細な報告は、大変ためになり、考えさせられることも多かった。たとえば、気仙沼市の医師会は、県のシステムとして配備された衛星携帯電話があったが、停電と同時に設定が初期化され、着信は可能だったが発信ができなかった。福島県では、医師の医療現場放棄という風評が流れ、安否情報の提供を拒む会員がいた。地震の日の夜は、ハイブリッド車に付いていた交流100Vの電源が役に立った。Facebookによる情報の伝達が信頼性の面から優れていて、被災地でもとぎれることが少なかった、など。

迅速で、かつとぎれない情報伝達、情報共有のシステムは、各地域の医師会でも懸案事項で、横浜市医師会では携帯メールを利用した会員の安否確認の訓練を、月１回行うことになった。神奈川県皮膚科医会でも、こういった非常時に対する備えを、少しは考えておいた方がいいかとも思う。Facebookやtwitterといった新しい情報通信・共有システムの構築を検討してみたい。

さて、そのFacebookであるが、昨年、高校の同窓会の席で、みんなでやろうということになった。患者としてたまに来院する小学校の同級生からも声がかかり、グループを作っておいたと連絡が来る。まだよく理解できていないので、全く使いこなせていない。どういう使い方がよいのか、詳しい会員の先生がいたら、ご教示いただきたい。

委員会報告

企画委員会だより

木花　光

本日の第139回例会はいかがだったでしょうか。典型的な帯状疱疹の診断は簡単ですが、抗体価などを調べないと確定診断できない例も意外とあるのがわかったと思います。人生いろいろ、帯状疱疹もいろいろ、です。

今後の例会のテーマとして、第140回（平成24年12月２日）が「皮膚科における画像診断の進歩」、第141回（平成25年３月3日）が「皮膚真菌症」、第142回（平成25年７月7日）が「乾癬と生物学的製剤の治療」を予定しています。乞う、ご期待。その時にこういうことについても話して欲しいということがありましたら、企画委員に

連絡してください。

このところ、例会の参加者が多く、会場が狭いくらいになってきましたが、前のほうの席はまだまだ空いていますので、今後もご出席よろしくお願いします。引き続き若い先生もお誘いください。

委員会報告

健保委員会だより

井上奈津彦

●Generic（ジェネリック）ブランドに囚われない、といえば聞こえはよいが

平成24年診療報酬改定により４月からは一般名処方加算２点が新設された。

現在、院外処方では後発品不可と署名捺印をしなくてはブランド物は手に入らなくなった。しかも、現在の一括捺印から、個々にチェックが必要になった。

欧米50%以上、日本16%程度といわれるジェネリックの処方率で、どうも我が国の医師はブランド好きのようだ、と考える者はいない筈だ。医療費の削減が急務であることは国民一人ひとりが感じており、我々医師も肝に銘じておかなければならない。ジェネリックの使用がその目的に適っていることは明らかであるが、“お上”が何としても我々にジェネリックを使わせたい真の目的が医療費の削減であるとは誰も思わない。我々医師がジェネリックを忌避する理由を悟ろうとしないが如くではあるが、実際は過去の失敗を認められないだけである。“お上”の常套手段である恥の上塗り策がむしろ滑稽である。しかし、恥も外聞もない権力者の無茶ぶりに、ただ為すがままの我々も困ったものである。

医療費の削減という名目はよいが、そのために適応外のジェネリックが処方されたり、効き目の悪いものや、効果は同じだが不純物の混じった粗悪品を処方される可能性がある。ジェネリックの全てを否定するつもりは無いが、それにより本来起こるはずの無い傷害が起こることは本末転倒である。“お上”が本気で国民の健康を考えているとはとても思えない。

ステロイド外用薬（ローション）のジェネリックで接触性皮膚炎を経験したことがある。先発品に戻したところ症状が軽快した。ジェネリック薬の大手メーカーのその薬剤は主剤は同じであるが、添加物が全く違っていた（下記文書より）。会員の皆様なら“あれか！”と思い当たる筈だ。

先発品の添加物

パラオキシ安息香酸メチル1.5mg、流動パラフィン、セタノール、オレイルアルコール、グリセリン、イソプロパノール、ステアリン酸ポリオキシル40、ポリオキシエチレン硬化ヒマシ油60、モノステアリン酸グリセリン、水酸化ナトリウム、クエン酸水和物

ジェネリックの添加物

セタノール、流動パラフィン、サラシミツロウ、中鎖脂肪酸トリグリセリド、ポリオキシエチレンセチルエーテル、セトマクロゴール、ポリオキシエチレンステアリルエーテル、エチルパラベン、ブチルパラベン、プロピレングリコール、エデト酸Na、pH調節剤２成分、その他１成分

このような悪い結果が出た場合、当然処方した医師の責任となると思うが、ジェネリックは同じ薬という一

般の認識とは別に、全く違う薬としてもう一度添付文書を全て読み、内容を理解していなければならない。しかも極端なことをいえば処方した薬剤のジェネリックの全てに対してである。さらには有効性・安全性に関するデータが存在しないものが多いので、それこそ治験のつもりで使っていかなければならない。

ある文献に、ジェネリック品にすべきでない薬品の項目が書いてあった。中毒量と有効量の差がわずかな薬剤としてジゴキシン、ワーファリンなど、と共に基剤により効果が異なり反応が予測不能のものとしてステロイドクリーム、ローションとあった。まさにその通りである。

平成23年度に神奈川県皮膚科医会健保委員会は下記の委員会を開催した。

◎第１回健保委員会　平成23年６月29日（2011年）

議題：①神皮136回例会健保Ｑ＆Ａの回答の検討
②縦覧、突合審査に関して
③その他　審査上の問題点に関して

◎第２回健保委員会　平成23年11月30日（2011年）

議題：①神皮137回例会健保Ｑ＆Ａの回答の検討
②生物学的製剤の件
③その他　審査上の問題点に関して

◎第３回健保委員会　平成24年２月29日（2012年）

議題：①神皮138回例会健保Ｑ＆Ａの回答の検討
②低薬価薬剤の取り扱いに関して
③縦覧、突合審査が始まることに関して
④その他　審査上の問題点に関して

平成24年診療報酬改定に関する説明会は行わず、変更点のみ文書にて会員に送付した。

委員会報告

編集委員会だより

河原由恵

今年も無事新しい「神皮」をお手許に届けることができました！「神皮」19号を手にとられた先生方の感想はいかがでしょうか。

昨年（18号）は原稿締切直前に大震災がおきたにもかかわらず、原稿をお願いしていた先生方からほぼ期限どおりにご入稿いただき大変ありがたく思いました。

編集委員会の仕事は、構成を決める第１回編集委員会（１月）とできあがりをチェックする第２回編集委員会（５月）よりなっています。この２回の会議はいわば水面にうかぶ水鳥の姿で、ふだんは水面下でのアシのばたつかせよろしく原稿・広告のとりたて（？）や校正といった地味な作業にとりくんでおります。全国でも注目される結束力を誇る神奈川県皮膚科医会の魅力ある活動内容、会員の先生方の仕事ぶりや多方面での活躍がいきいきと伝わる、そんな誌面であることを目指しています。